

# ポローニア

## paulownia



絵:「お水たっぷり絵の具遊び」(附属小学校2年生)

## 目次

### 教育局教育長挨拶

#### 巻頭言「はじめてのことからの学び」

◆茂呂雄二……………2

#### 令和元年度 附属学校研究発表会が開催されました

◆雷坂浩之……………2

#### 修学の旅行 ◆青木伸生……………3

#### 枠を超えてワクワクしよう ～駒場の物の理～

◆今和泉卓也……………3

#### 第1回WWL研究大会・第23回 総合学科研究大会を

開催しました ◆建元喜寿……………4

造形芸術科 少年詩集絵画の取り組み ◆青柳泰生……………4

#### 「ふるさと祭り」全国各地の祭りや食文化から

学びを広げて ◆杉田葉子……………5

卒業生とつながる・卒業生をつなぐ ◆丸山葉子……………5

#### 附属桐が丘特別支援学校 中学部「池袋へ行こう」

◆新 洋子……………6

第42回 卒業式 ◆岡田幸一……………6

令和元年度 卒業研究最終発表会 ◆徳竹忠司……………7

協働して創り上げる喜びを! ◆青松利明・皆川あかり……………7

第15回「科学の芽」賞 募集要項……………8



筑波大学  
University of Tsukuba

附属学校教育局

<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp>

vol. 48

# はじめてのことからの学び

附属学校教育局 教育長 茂呂雄二



YUJI  
MORO

先の見通しの立たないコロナ禍のなかでの、各附属学校ならびに教育局の教職員のみなさんの懸命な対応に心から感謝申し上げます。児童生徒の安心安全への配慮や、リモートでの授業というはじめての対応、家で過ごす子ども達への連絡や状況確認などはじめてのことばかりで大変だと思います。私自身も、はじめてのオンライン授業の準備ということで、得手とは言えないICTについていくのに、四苦八苦しましたが、チャレンジしてみると意外とできることに自分でも驚いたりしています。

今回の経験では、外の世界から到来した不気味なものへの情緒的反応や、さまざまな物語や言説を、新たに知ることになりました。また、日本の教育環境がテクノロジーの面で非常に遅れている事も改めて実感することになりました。自分自身については、やればできる事に、いかにチャレンジしていなかったかを振り返る機会にもなりました。例えばVPN接続など便利さは知っていましたが、はじめて使ってみました。私の専攻するパフォーマンス心理学では、新しいことへのチャレンジをパフォーマンスと呼び、パフォーマンスを可能にする環境を共創する事が学習です。コロナ禍を機会にまだまだ自分に学習可能性があることを実感しました。

## 令和元年度 附属学校研究発表会が開催されました

附属学校教育局 教育長補佐 雷坂浩之

令和2年2月22日(土)に、教育局主催による附属学校研究発表会を東京キャンパスにおいて開催しました。今回の研究発表会は、新しい学びの捉え方を正に体现しつつ、インクルーシブ社会実現のための実験教育に関する附属学校と教育局による研究成果を、「附属学校群の新たな試み～境界を乗り越えて～」という研究主題のもとに公開しました。当日は、学外からの一般の方々を含め約100名の参加者がありました。

前半の全体会では、「黒姫・三浦の共同生活の意義と展望～5年間の共同生活を振り返って～」というテーマでシンポジウムを行い、共同生活の実行委員長を務めた卒業生や生徒実行委員会をサポートしてきた教職員、子供たちの意識の変容に関す

る調査研究を担当した指導教員など、シンポジストそれぞれの立場からの意見を発表していただきました。シンポジウムの中では、この5年間にわたる取り組みが生徒に対してどのような影響を及ぼすものであったのか、インクルーシブ教育や共生社会の伸長に向けてどのような効果を生み出したのか、筑波型インクルーシブ教育として今後さらに発展させるために何が必要なのかなどについて議論を深めることができました。

後半は、「演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創」、「ICTを活用した授業実践～附属学校群での実践を通して～」、「グローバル教育の進め方～ラウンドテーブル形式による課題の検討」というプロジェクト研究グループごとに分科

会を行いました。また、各附属学校のポスター発表を通じて、教師教育・先導的教育・国際教育などの拠点校としての各附属学校の使命や役割、研究内容などを紹介しました。

本研究発表会は、附属学校や教育局の教育活動や研究内容を広く発信するための良い機会となりました。



全体会の様子



分科会の様子



# 修学の旅行

附属小学校 教諭 青木伸生



6年生は、毎年2月の後半に京都・奈良に修学旅行に行く。子供達にとっては、卒業間近、最後の思い出づくりとしての大きな行事である。修学旅行には大きく3つの目的がある。

- ① 今まで共に過ごしてきた仲間と心を通わせる機会とすること。
- ② 実際に自分の足で訪れて、日本の歴史の一端にふれること。
- ③ 自分の住んでいる東京から遠く離れた地で、安全に計画的に行動すること。

子供達は3泊4日という日々を大切に有意義に過ごした。修学旅行が終われば、あとは卒業式を待つばかり。仲間と過ごすことのできる日々は残りわずかであることは十分に理解している。様々な場面で、お互いに協力し、楽しむ姿が印象的であった。前半に2泊した京都では、清水寺、金閣、銀閣など有名な神社仏閣を巡る。座禅体験もした。その後はグループごとの自主研修活動に出かけていく。事前にインターネットやパンフレットなどで活動計画を立てているとはいえ、土地勘のない場所で、計画通りに目的地に辿り着き、最後は自力で宿まで帰ってこなければならない。2日目は京都で、3日目は奈良でのグループ活動を行った。今までに積み重ねてきた数々の宿泊行事の経験を生かした、集大成としての活動であった。奈良で法隆寺、薬師寺などを見学した後、新大阪から新幹線で東京に帰る。

この修学旅行の3日目に、安倍首相から新型コロナウイルスの影響による学校の休校措置が要請された。子供達は、4日間の日程を無事に終え、東京に戻ったが、今回の修学旅行が、まさに小学校での学業を修める「最後の授業」となった。



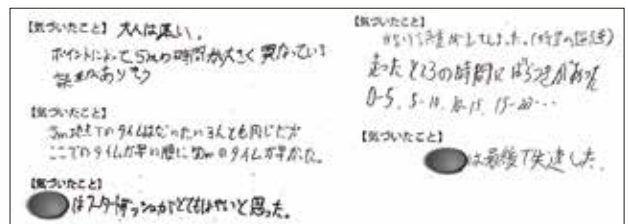
# 枠を超えてワクワクしよう ～駒場の物の理～

附属駒場中学校・高等学校 教諭 今和泉卓也

そもそも物理は「物の理」。視点を変えれば、あらゆるところに横たわっている。実践例を列挙してもつまらないだろうから、ここでは、中学理科の「運動」を例に挙げてみたい。「運動」と聞いて、「運動エネルギー」を思い浮かべる人は少ないだろう。ふつうは「体育」に近いイメージだ。じゃあ、ランニングに物理はないのか。走ってみよう。50m走を何人かの生徒を募ってグラウンドで走ってもらい、10mごと生徒たちを配置して、タイムを計る。そして速度の変化を表すグラフを描かせると、面白い。縦軸は速度だが、横軸は10mごとの距離なのだ。体育で描いたときは距離だったという。なるほど。物理は横軸を時間で描くことが多い。さあ、どうしてだろう？ 教科の枠を超えると、同じことも視点が違い、学問の特性も浮かび上がってくる。

さて、このタイムはどれだけ正しいのか？ 人によって、タイムもばらばらだ。別の時間、教室で、この前生徒が走ってくれた動画を全員が観て、ストップウォッチで測る。案の定、タイムはばらつく。今度は「統計」である。ばらつく中で言えることは何か。科学で重要な「不確かさ」に関する学習につながる。

「物理」について探究しようとする、「いわゆる物理」という枠から外れた方が、より「物理」が浮き彫りになるケースも少なくないと感じている。また、物理に限らず、教える側が、必要に応じて、枠にとらわれることなく授業を展開している姿を見せることは、生徒たちの不要な固定概念を壊し、より自由に学問を行ってよいんだというメッセージになる。その点においても、重要ではないかと思う。



50m走測定のあと、中2の生徒たちが気づいたこと。特に何も学んでなくても、速度や測定の不確かさなど、物理として重要な考えが現れてきた。



現在のオンライン学習でも、テラー展開や、電離定数など、「数学」や「化学」に深く関係する分野を動画で配信している(高3物理)。プラットフォームはMicrosoft Teams。





## 第1回WWL研究大会・第23回総合学科研究大会を開催しました

附属坂戸高等学校 教諭 建元喜寿

令和2年2月14日(金)および2月15日(土)に、「第1回WWL研究大会」・「第23回総合学科研究大会」を本校を会場に行いました。令和元年度に、SGHの成果をベースに、文部科学省WWL(ワールドワイドラーニング)コンソーシアム構築支援事業の拠点校に選ばれ、そのはじめての大会となりました。

1年次「産業社会と人間」・2年次「T-GAP(つくさかグローバルアクションプログラム:社会課題解決活動を重視した総合的学習の時間のプログラム)」・3年次「卒業研究」という、総合学科の3年間を貫く学びの発表とともに、本大会では、WWL事業の拠点校として、国際連携協定を締結しているタイ・カセサート大学附属高校から1年間、本校に留学している生徒や、台湾から留学している生徒の発表、本校からインドネシアの高校に留学していた生徒の報告もありました。

また、WWL事業の重要な連携先であるSEAMEO(東南アジア教育大臣機構)と筑波大学のパイロット事業として、SEA-teacherプログラム(アセアンの大学の学生が日本で教育実習を行い、筑波大生もアセアンの大学で教育実習を行うプログラム)を実施し、参加したアセアンからの大学生の発表もありました。

新型コロナウイルスの影響で、今後のグローバル教育の展開が不透明な時期ではありますが、本校は、海外の連携校とともに、これからのグローバル教育の在り方を模索・発信し続けていきたいと思います。



## 造形芸術科 少年詩集絵画の取り組み

附属聴覚特別支援学校 教諭 青柳泰生

本校高等部専攻科造形芸術科では2017年度より出版社「銀の鈴社」が主催する「子どものための少年詩集」との連携授業を行っています。はじめに国語科の授業で詩の中の情景や登場人物の情感を味わい、言葉の意味や表現内容を理解した後、構想画の題材として油絵制作に取り組みます。生徒は、自らのイメージにふさわしい画像や資料を準備して、詩の中で用いられる言葉や場面を表すために、スケッチを繰り返して構想を練り上げます。絵画制作におけるイメージや雰囲気づくりは、その言葉の意味の理解が大切であるため、擬音や抽象的な事柄を表す言葉を理解していない場合などは、授業者が図や絵で示していく指導が重要になります。いざ画面に描く際には、自分が主張したいことをストレートに表現できるかが作品の善し悪しに関わってきますので、主題となるかたちを大きく捉え、描く線を整理していく指導が必要となります。

完成した作品は銀の鈴社が公募する「子どものための少年詩集」絵画作品へ応募し、採用された際には詩集の表紙、

裏表紙、本扉のいずれかに採用されています。2019年度は幸運にも3名の生徒が応募し3名ともに採用していただくことができました。完成作品を鑑賞する授業では、銀の鈴社のご担当の方にも参加していただき、生徒がお互いの詩のイメージをどのように受けとめたのかを発表し合い、表現方法の違いを話し合いました。こうした活動は教科間の連携を通しての実現が可能であり、生徒にとっても知識や技術を関連付けて学習できる貴重な機会となっています。また、生徒にとっては、自らが制作した作品が本に掲載される経験が何よりも大きな自信につながっています。





## 「ふるさと祭り」 全国各地の祭りや食文化から 学びを広げて

附属大塚特別支援学校 中学部主事 杉田 葉子

本校中学部では、生徒自身の「願い」や「思い」を自ら考え、表現する力を高めていけるよう様々な学習機会を設定している。生徒一人一人の「願い」をくみ取り、その「願い」の一つ一つが実現する過程を繰り返すことで、更なる「願い」や「思い」が生まれ、その気持ちを人へ伝える意欲や力につながるのではないかと考えるからだ。

『生活』の授業の中では、生徒の「願い」や「思い」から複数のグループを作り、興味関心のある事柄について調べ学習を行う。そして、実際に校外学習を計画し、体験したことをまとめて発表することを行っている。その授業の一環として、毎年1月に東京ドームで開催されている「ふるさと祭り」へ校外学習として出かけている。「ふるさと祭り」では、

全国各地の祭りや特産品の展示販売が行われており、目の前で迫力ある祭りを見学したり、様々な特産品の中から自ら選択した物を食したりして、興味関心を広げる良い機会となっている。このような校外学習の機会は、買い物学習や、公共施設の利用やマナーを学習するだけでなく、自主的・自律的に活動する意欲を高め、家庭や地域での余暇活動への参加等、将来の社会生活をさらに豊かにする取り組みにつながっている。



## 卒業生とつながる・卒業生をつなぐ

附属久里浜特別支援学校 教諭  
丸山 菜子



「卒業生が集う会」の様子

本校では、昨年度、卒業生同士や、卒業生と学校とがつながる場として「卒業生が集う会」や「夏休みプール開放」を実施しました。

2月15日(土)に開催した「卒業生が集う会」では、9名の卒業生とそのご家族が参加しました。同日開催の「のびのびまつり」(地域に開く学校イベント)の閉会後ということもあり、昨年度幼稚部を修了した7歳から、社会人として働いている成人まで、幅広い年齢の卒業生とそのご家族、本校職員、旧職員が一堂に会し、茶話会やビンゴ大会を楽しみました。卒業生一人一人の自己紹介と近況報告の場では、余暇に楽しんでいることや、好きな学校の授業、仕事の紹介など、それぞれの環境で自分らしく頑張っていることを教えてくれました。卒業生やそのご家族からは、「懐かしい

先生に会えることを楽しみにしている」「久里浜で出会った友達とつながることができて嬉しい」といった感想を寄せていただきました。

また、夏季休業中のプール開放も、卒業生が集う場になっています。後輩や先生、旧友に会えることを楽しみに、毎年参加してくれる卒業生もいます。安全面の配慮は必要ですが、懐かしい先生や友達と元気一杯楽しめる場として好評です。在校生やそのご家族にとっても、卒業後の余暇活動の一つとしてイメージを広げる機会となっているようです。

今年度は、感染症の影響で行事の見直しが必要になりますが、今後も、学校の役割の一つとして、自閉症のある方同士がつながる場や卒業後の居場所を提供していくことは大切だと思います。



「夏休みプール開放」の様子



## 附属桐が丘特別支援学校 中学部 「池袋へ行こう」

附属桐が丘特別支援学校 教諭  
新 洋子

桐が丘特別支援学校の中学部では「総合的な学習の時間」での学習を活かして、池袋での校外学習に行ってきました。

今年の1年生は2グループに分かれて、百貨店の中の目的の場所へ、2年生は自分の目指したい職業を調べるために図書館へ、3年生はパラリンピックへの取り組みや食品ロス問題を調べるために豊島区役所やレストランでの聞き取り調査に挑戦し、どの学年も充実した1日を過ごしました。

「食品ロス」について調べた中3のK君は豊島区役所と昼食で訪れたお店に事前アンケートを実施し、回答を得ることができました。食品ロスについては積極的に取り組まれており、食材の発注や仕込みについて、来客数を予想することでコントロールし、ロスにしない努力を知ることができました。

校外学習に行った後は、学年ごとに成長や変化を自己評価して発表につなげています。下級生の発表を聞いて上級生は、「自分たちも同じような失敗をしたよ」とか会計の時に支払いやすいように工夫した後輩に「すごいね、よく思いついたね」など感想を伝えたり、反対に上級生の発表を聞いて、「自分の知りたいことを人に聞いたり、見てきたりしている先輩はすごいと思った」など自分の思いを表現したりすることも、回数を重ねるたびに上手になっていきます。また来年の「池袋へ行こう」ではどんなチャレンジがみられるのか楽しみです！



## 第42回 卒業式

附属中学校 担任長 岡田幸一

令和元年度卒業式のあった3月14日(土)は、とても寒い日で一日冷たい雨が降っていました。式が挙行されるまでには、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って様々な紆余曲折がありました。結局、来賓・保護者・在校生の列席はなく、会場は育鳳館から広い体育館に変更され、時間も半分ほどに短縮されての実施となりました。奏楽も、別れを惜しむ最後の「蛍の光」斉唱もなし。在校生の送辞、保護者挨拶や記念品の披露は文書で配付。異例の式となりました。それでも197名の卒業生は、伝統ある筑波大学附属中学校の卒業生として相応しい姿であろうと思います。離ればなれの席から凜とした呼名の返事を聞くことができました。背筋を伸ばして着席した頭は動きませんでした。桐陰会委員長の答辞は、いたずらに感傷的にならず、卒業生を代表しようとする気概に満ちていました。教職員にとり、彼らの3年間の成長がまざまざと実感される時間となりました。

最後に卒業生たちは、先生達が並んで見送る通路を通して退場しました。その先には教職員が作成した心ばかりの「作品」がお出迎え。これも今回のみかもしれません。

式が終わると曇天から雲が舞い降りてきました。まるでなごり雪のように思われたことです。



教職員制作「虹」でお祝い



生徒のみの卒業式





## 令和元年度 卒業研究最終発表会

理療科教員養成施設 講師

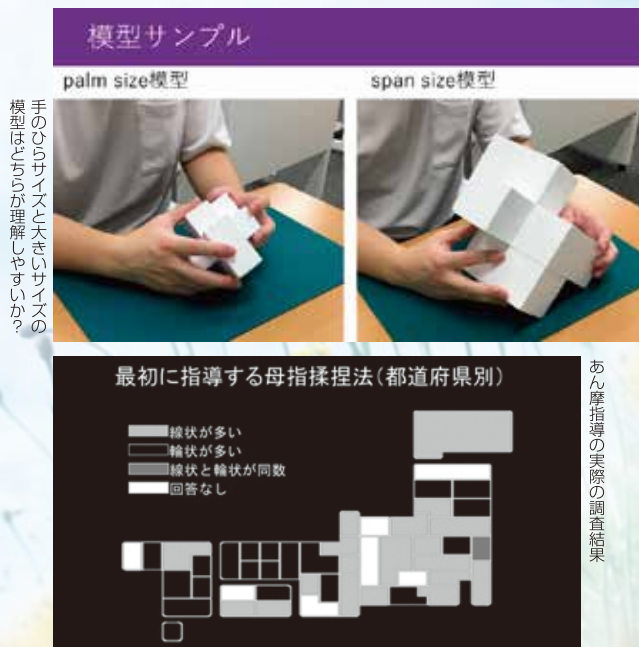
徳竹忠司

理療科教員養成施設では、2年間の在学中に89単位を取得しています。卒業研究は2学年次に開講している科目ですが、2学年に進級してから活動を開始したのでは、充実した研究活動が行えないため、予備的な活動として、1学年から少しずつ準備を始めています。理療科教員養成施設の在學生は視覚障害を有している学生が多いことから、単独での研究活動に障壁があるため、数名でグループを作り、各自の最大限の努力で作業を分担しています。

1年次の活動は構想を作成するための活動から始まり、筑波大学人間系倫理委員会東京地区委員会の審査を通過するところを目指します。専任教員から研究についての指針が示され、興味のある研究ごとにグループが形成され、文献研究により、行おうとしている研究テーマの領域に関する現状を知ることから始めます。

令和元年度に実施された研究活動は4件でありました。各グループのテーマは次の通りでした。「ブラインドマラソンにおける腕振りの現状調査と伴走者の腕振りが視覚障害者ランナーに与える影響」「視覚特別支援学校における立体コピーの使用状況に関する調査」「あん摩基礎実技指導

の実態とあん摩実技指導担当教員の標準化に対する意識調査」「模型の大きさの違いが形状の理解に与える影響に関する研究」。下の画像は発表会で使用しましたプレゼンテーション画像の一部です。



## 協働して創り上げる喜びを!

附属視覚特別支援学校 高等部教諭 青松利明・皆川あかり

本校高等部では、朝日新聞社に入社した本校卒業生の橋渡しがきっかけで、2019年度から文化庁・朝日新聞社主催「声の力プロジェクト」に参加することになりました。「視覚に障害のある高校生が、声による表現方法を学ぶことで、自身の可能性を広げること」、「アニメ文化を共通言語として視覚特別支援学校と通常校の高校生が協働し、心のバリアを取り払うこと」、「社会全体に視覚障害への理解が広まること」を目的としたプロジェクトです。

まず本校生徒8名が、夏休みにプロの声優による特別授業で「声の表現方法」を学びました。それから1月には、本校生徒5名と附属高等学校の生徒5名が混合で2チームに分かれ、2泊3日のラジオドラマ制作合宿に挑みました。初日は緊張し硬い様子でしたが、夜のチーム別自主練習や、翌日のレクレーションを通して打ち解け、2日目の練習では、講師が驚くほど生き生きとした演技になっていました。そして最終日、文化放送での収録では、本物のスタジオに緊張しながらも両チームとも満足のいく演技を披露しました。

活動を終えて生徒たちは「障害の有無は気にならなかった」「一緒に活動していて困ったことはなかった」と言います。それはきっと、単純に「アニメ好きな高校生」が集い、「一つのものを創り上げる」という共通目標を持って過ごせたからだと考えます。「障害者と健常者」などと気負わず、どうしたらお互いが動きやすくなるのか、どうやれば息を合わせられるのか、楽しみながらコミュニケーションできた結果なのではないでしょうか。

まだ初回の取り組みです。今後より幅を広げて活動していきたいと考えています。



夜のチーム別自主練習

合宿の様子

文化放送での収録を終えて





問 <http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagakunome/index.html>

「ポーロニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポーロニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポーロニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポーロニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポーロニアと命名した。

発行日……………令和2(2020)年 5月31日  
 発行者……………附属学校教育局教育長 茂呂雄二  
 発行所……………筑波大学附属学校教育局 広報誌  
 広報戦略推進委員会  
 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800  
 デザイン……………スピーチ・バルーン  
 印刷……………広研印刷 使用紙:Ultimax [日本製紙]

